

聴く

新潟いのちの電話だより

2011.6

No.109



相談電話

(025) 288-4343

上越(025) 522-4343

長岡(0258) 39-4343

新発田(0254) 20-4343

村上(0254) 53-4343

ご挨拶

石本 勝見

本年度4月、眞壁前理事長からバトンを引き継ぎました石本でございます。どうぞよろしく願いいたします。

私はこれまで、相談員の研修スタッフとして、新潟いのちの電話の創立以来かかわってきました。その間、まったくの手弁当で誠実に、熱心に相談活動を続けておられる相談員の皆様を間近に見てきて、ずっと尊敬の念を抱いてまいりました。今回、理事長を引き受けることに際して、いささかの躊躇もありました。もとより力不足の私のようなものに、はたしてできるのか？不安な気持ちもありました。それにもかかわらず、あえてお引き受けしたのは、自殺予防を目的に掲げる、この意味ある活動に、私も、私なりに、何かお役に立つことがあれば、それはしなければならぬ、という思いであります。

眞壁先生から「お願いしたい」という有難いお話もあり、また、勤務先の新潟県立大学からも、幸いにして了承いただきましたのでお引き受けした次第であります。

遅くなりましたが、このいのちの電話の活動を支えていただいております後援会の皆様、維持会員の皆様、ご寄付をいただいた多数の皆様に心から御礼申し上げますと共に、今後も続けて御支援賜りますよう伏してお願い申し上げます。

皆様の支えがあればこそ、この活動を継続することができております。日本で、我が新潟県で、少しでも自殺で命をなくされる人を減らしたい、そんな苦しい胸のうちを話していただきたい、一生懸命、誠実に、心をこめて聴きたい、これからも、そんな「新潟いのちの電話」でありたいと思っております。

(新潟いのちの電話 新理事長)

大きな樹に育てていただきました

眞壁伍郎

どうなることかという初めの危惧をよそに、新潟いのちの電話は大きく育ちました。立ち上げからの30数年を振りかえると、その思いひとしおです。これは、新潟県の自殺者が多いことを、何とかしなければと大勢の方々が真剣に考えてくださったことの現れでした。

自殺率の全国順位は、次第に下げているものの、新潟県の自殺率は、依然として高いところにあります。なぜ、新潟県はそうなのか。これはわたしたちが新潟いのちの電話を開設する以前からの疑問であり、課題でした。

そしていよいよはっきりしてきたことは、これはどこか有能な相談機関があれば、それで事が済むような、単純なものではないということです。人はだれしも、人生のさまざまな段階で、死に思いが傾くような難関を経験します。「だれもがみんな悩みをかかえて生きている」が、電話の向こうから聴こえてくる大勢の方々の悩みを聴いての実感です。

そうであれば、わたしたち一般市民が苦しいときの助け合いを、「お互いさま」と覚悟して行なえるかどうかです。いのちの電話の相談員は、けっして専門家でも、セミ・プロでもありません。これを、いのちの電話の設立以来、大勢の相談員の方が、ごく当り前のこととして行ない、しかも匿名で無償のボランティアとして励んでくださいました。「一人でもみずからいのちを絶つ人がないように」が、その大きな願いだったと思います。

WHO(国際保健機関)は、自殺防止は21世紀の大きな課題と位置づけ、Task for All(すべての人の課題)と呼びかけています。

直接、電話相談にあたる相談員だけでなく、新潟いのちの電話は、それを支えてくださる後援会や、この「聴く」を読んでもくださる大勢の県民・市民の方々の励ましとご尽力によって、ここまで大きく育てていただきました。

小さな芽が、大きな樹に育ち、やがてその木陰で、思い悩む人のだれもが安らぎを見出すことができるようになればと願っております。

石本新理事長のもとでの、新しい発展をわたしも夢見ております。

(新潟いのちの電話 前理事長)

ある日の相談室より

「地震、ひどかったよ。えらい目に遭った」

東北にお住まいの方です。私はすぐ7年前の中越地震のことを思い出しました。次々と大きな揺れがやってきたあの日のことです。

「大変でしたね」

「町はめちゃくちゃだよ。地震と津波とで怖かったねえ」

この方の感じた怖さを思うと、黙って受話器を握りしめるしかありませんでした。

「余震も多くてね、毎日せつない。あ、また揺れてるよ」

「大丈夫ですか？そこは安全なところですか？物が倒れたりしてませんか？」

「今のはそんなに大きなのでなかったね。よかった。毎日こんな感じで、いつまで続くのかねえ」

私が経験した7年前もそうでした。余震がいつ収まるのか、という不安をいつも抱えていました。

「生きてるだけでありがたいね。家の中はやっと片付いた。電気も水も来たしね。明日から仕事。職場の後片付けしないと。この先、どうなるか分らないけど、やるしかないねえ」

この方の話を聞きながら、『大事の後は、普通に暮らす』という祖母の言葉を思い出しました。今までのように暮らすことはできないけれど、当たり前のことが普通にできるありがたさを思いながら、今日も電話の前に座っています。

(内容は、電話を基に構成し直したものです)



連翹の花

川尻玲子

新発田市に連翹街道といわれる道路がある。町村合併で新発田市となったが、旧紫雲寺町の中心街を通る昔ながらの道である。両側に家々が並び、歩道もないためスピードは出せないが、この時期になると週末には車で必ず一回は通ることになっている。先日も春の陽気に誘われて買い物でたらこの道を通ってきた。連翹は旧紫雲寺町の花ということで各家庭に苗を配り植えたとのこと。そのため3月の末から一ヶ月ほどの間、道路の両側は連翹の黄色い花でいっぱいになる。枝が伸び放題の連翹もあれば、きっちりと刈り整えられた連翹もある。個性があっておもしろい。黄色い連翹に混ざって赤やピンクの椿の花、真っ白いモクレンなど、家々の庭ごとの彩りも楽しめる。わずか数キロではあるが、春が来た喜びをかみ締めることができるのである。

震災の被災地でも桜が咲き始めたという。この震災で多くのものを失い未だに不自由な生活を強いられている人たちがたくさんいる。中にはあの日で時間が止まったように感じている人もいるだろう。本当に春が来たと感じるにはまだまだ時間がかかるかもしれない。しかしどんなに冬が長くても春は忘れずにやってくるのである。

(臨床心理士)



毎月10日(午前8時より翌日午前8時まで)は
フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」が実施されています。
電話番号0120-738-556

お知らせ

新潟いのちの電話理事長交代 新理事長に石本勝見氏

4月より眞壁理事にかわり石本理事が新理事長の任にあたることになりました。

眞壁前理事長は、新潟いのちの電話開局に尽力し、理事長としては1999年から12年間、いのちの電話の活動を支えてきました。

石本新理事長は、現在新潟県立大学の教授です。また、新潟いのちの電話設立時からの相談員の研修スタッフです。

新理事長のもと、よりよい相談活動を続けていけるように、一丸となってがんばっていきます。

皆様の変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

会費納入のお願い

東日本大震災に見舞われ、不安定な社会情勢のなか、活動を支えてくださっている大勢の会員、団体、企業の皆様のご協力に心から感謝しております。

いただいた会費は、むだなく有効に使っていきます。会費納入のご協力を、どうぞよろしく願います。

29期 電話相談員養成講座開講

今年は24名の方々が、29期生として、一年間の講座を受講中です。今年も多くの方の男性の受講生がいます。

昨年3月に認定された28期生22名は、4月から相談員として活動を始めました。

今年度は相談員総数172名で、年中無休、24時間体制の電話相談を受けています。

東日本大震災後は、被災された方からも電話が掛かってきています。

これからの予定

チャリティバザー（後援会主催）

日時 9月25日（日） 午前11時から
会場 新潟市総合福祉会館

バザーで販売できる物品のご寄付をお願いいたします。

新潟市内の方はご連絡いただければ、受け取りにうかがいます。

2011年6月20日発行

社会福祉法人 新潟いのちの電話

〒950-0994 新潟市中央区上所2-2-3 新潟ユニゾンプラザ ハート館
事務局 TEL (025) 280-5677 FAX (025) 280-5677

この冊子は赤い羽根共同募金配分金を受けて発行しています。

安らぎ

この世に生まれた者はみな
生涯、安らぎの場を求め
受け入れ、抱きしめ
暖かく支えてくれるひとを求めつづける

ぬくもりのある巣と居心地のよい港
そして、ほっとできる安らぎの家
だれもが、それを求めつづけるのだ
だが、はたしてそんな家はどこにあるのか

よい住居があれば、よいわけではない
どんなにつらくとも、わたしたちは
いつの日か、そこを去らなければならない
であれば、もっと切実なのは
愛のあるひとがそばにいることだ

そのとき、わたしたちは
どこにいても、安らぎを見出し
暖かさを感じ
安心して、おたがいの信頼と配慮に
身をゆだねることができる

フィル・ボスマンス